

日本の貨幣の生い立ち

公認会計士としても作家としても活躍されている山田真哉さん。
 連載の最終回は日本の貨幣の黎明期とその発展についてです。
 意外な事実に気付かされます。

2年にわたって続いた連載「会計士のやさしい
 お金のお話」も、とうとう最終回である。

今回は、私が好きな「歴史」について語らせて
 いただきたい。お金の視点から見ると、学校で習っ
 た日本史もまったく異なるものに見えてくる、と
 いうのが最終回のテーマである。

たとえば戦国時代。この時代が「日本の『貨幣』
 の歴史における一大転換期であった」という事実
 は、あまり知られていないのではないだろうか。
 その核心に迫る前に、戦国以前の日本の貨幣
 史がいかなるものであったか、簡単におさらいし
 よう。

試練にさらされた
 貨幣経済のあけぼの

まず、飛鳥時代に国内最初といわれる金属貨

幣「富本銭」が生まれた。そして、平城京の建

設費を捻出するために発行されたのが「和同開
 珎」である。これらがあまりに有名なため、日本
 では国産の貨幣が絶えず流通していたと思ってい
 る人もいる。だが、実は国産貨幣の歴史は平安前
 期にいったん終焉を迎えている。原料である銅の
 枯渇や貨幣政策の失敗などが原因だ。

そして金属貨幣を失った日本は、絹や布を貨
 幣代わりにする「物品貨幣」の時代へと逆戻り
 してしまう。この逆行は世界的に見ても珍しい
 現象である。

そして、日本が再び金属貨幣を手にするのは、
 平安末期。平清盛が、中国の貨幣である「宋銭」
 を輸入し日本の通貨として使用する政策をとった
 のだ。この宋銭は、朝廷や鎌倉幕府の反対にもか
 かわらず民間主導で爆発的に普及し、その後の

山田 真哉 やまだ・しんや

公認会計士・税理士。1976年兵庫県神戸市生まれ。大阪大学文学部史学科卒業。大手監査法人を経て、現在、会計事務所所長。企業のCFOや政府の委員、経済ドラマのブレーン等も務める。

代表作は160万部突破の『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』など。会計ミステリー小説『女子大生会計士の事件簿』はシリーズ100万部を突破し、TVドラマも放映された。現在、NHK総合『ビジネス新伝説 ルソンの壺』、BS11『宮崎美子のすずらん本屋堂』などにレギュラー出演中。最新刊は、『問題です。2000円の弁当を3秒で『安い!』と思わせなさい』。



鎌倉・室町時代の経済発展を支え続けた。

ところが戦国時代、貨幣の世界は大混乱期を迎える。これまで貨幣普及の原動力となっていた「銭の価値はすべて同じ（1枚＝1文）」というルールが崩壊してしまったのだ。結果的に日本で流通する銭は多岐にわたり、それぞれに「1枚＝0.5文」、「1枚＝0.1文」といった異なるレートがつけられ、円滑な取引を阻害するようになってしまった。

こうした貨幣の混乱は経済に影響を与えただけではなく、領主たちの統治能力をも問うことになった。

実は、ここで見事な経済手腕を見せたのが、全国統一の先駆けとなった織田信長と徳川幕府を完成させた三代将軍徳川家光である。

一大転換期にあった戦国の貨幣経済に立ち向かった、彼らの活躍について、少し詳しく見てみよう。

国内での固定為替レートを導入した信長

戦国時代は、銅銭だけでも40種類以上が乱立し、金や銀、布や米も貨幣とされたという日本史上、稀有な時代である。この貨幣の乱れは、何が原因だったのか。

平安末期より、銅銭は自国では作らず、中国からの輸入に頼ったことは先にお話した。そのため、室町時代中期に中国が銅銭から銀を中心

とした貨幣制度にシフトし、銅銭を作らなくなった結果、日本は銭不足に陥ってしまったのである。

日本が中国の通貨政策の影響をもろに受けた形であり、現在の世界経済が、アメリカの政策の

影響を大きく受けてしまう点によく似ている。

有名な「応仁の乱」という内乱が1467年にあるが、これも銭不足を原因とする、細川家と大内家との間の銅銭輸入を巡る争いという側面もあつたのだ。

その後、銭不足は「撰銭（えりぜに）」という行為を生んだ。撰銭とは、売買の際に銭貨を「えり好み」することである。それまではどんな銅銭でも価値は「1枚＝1文」だったのが、銅銭に書かれた銘文や形によって、1文以下の銅銭が大量に発生したのだ。

「撰銭」の原因には諸説あるのだが、私は銅銭の価値に差をつけることで、商人たちが独自に通貨供給量を調整し、インフレやデフレに傾いた経済を安定させようとしていたのではないかと見ています。つまり、いまの日銀のような役割をそれぞれ独自に果たそうとしていたのだ。これが、戦国時代初期の話。

しかし、撰銭が進むと、取引のたびに手間がかかり、銭が忌避されるようになってくる。銭が流通しなければ、商売はさらに不便になり経済活動も滞る。そのため、各地の戦国大名は撰銭を規制する法律を出すのだが、その中でも一番革新的な法律を出したのが織田信長であった。

それまでの一般的な法律では「××という銭の使用を禁止する」、「△△という銭は支払額の3割まで混ぜてもよい」といったものだったが、信長は、「銭を4つのグループに細分化し、おの



おのレートを決める」という『為替レート』の概念を追加したので。

為替レートは民間の撰銭でも使われていたが、人によって基準が異なるうえ、日々レートが変動する不安定なものだったと思われる。信長はこの無秩序な現場ルールを統一し、安定した「固定相場制」を導入したのである。

こうして信長は、他の戦国大名よりも一歩抜け出した存在になっていった。

なお、時代劇で信長が登場したら、ぜひ織田軍の旗印を見てほしい。旗には、永楽銭という銅銭が描かれているはずだ。信長がどれだけ貨幣政策を重視していたかがわかる一例である。

銅銭復活を成し遂げた徳川家光

平安時代に途絶えた「日本独自の銅銭」を、700年ぶりに復活させたのは徳川家である。「寛永通宝」という名を、ご存じの方も多いのではないだろうか。銭形平次でおなじみの銅銭である。徳川幕府の成立時に権威の象徴として作られたと思われるが、実は、その登場は三代将軍・家光の時代になってからである。

なぜ家康や秀忠が作ろうとしなかった日本独自の銅銭を、家光が復活させたのか？

その理由の一つに、「海外への銅銭の大量輸出」が挙げられる。

日本は、戦国時代半ばまでは銅銭を輸入に頼っ

ていたが、国内の鉱山開発が進んで銅が大量産出されたため、各地の大名や民間人によって、中国銭をマネた銅銭が大量に作られるようになった。その結果、江戸時代初期には、逆に日本が銅銭の輸出国になっていたのである。それも、品質が極めて高かったため、日本やオランダの商人たちが大量に買い付けて東南アジアに輸出していた。

しかし、銅銭の大量輸出が続くことは、すなわち国内の銅資源の大量流出である。銭不足を引き起こしてしまった当時は銅銭のほかに金貨・銀貨も存在していたが、少額決済の場において銅銭は欠かせなかったのだ。

これを食い止めるには、銅銭の輸出を禁止するとともに、外国で流通しないよう、中国銭のマネではない独自の銭を作る必要があった。そこで家光は、1635年に日本人の海外渡航・帰国を禁止（朱印船貿易の終了）、翌年に寛永通宝を発行、さらにその翌年には銅の輸出を全面禁止したのである。そして、1639年には鎖国が完成する。鎖国には、新たに構築された貨幣システムに、銭の流入など海外からの経済的影響を排除する目的があったのだ。

さて、寛永通宝の発行にはもう一つの理由がある。それは、1635年の「参勤交代の義務化」である。参勤交代は、長期にわたって大人数が旅することで食事や宿の代金が大変な額になるうえ、宿場町などでその都度、少額決済をしなければならぬ。これをスムーズに実施させるため

日本の貨幣の生い立ち ¥ 連載エッセイ 会計士のやさしいお金のお話

第8回



に、幕府は大量の銭を用意する必要があったのだ。そして、大量であるだけではまだ足りない。全国で価値が統一された銭がなければ、大名は江戸までの道中、通過する地域ごとに通用する銭を用意しなければならぬ。

こうした背景により、家光は旧来の銭を廃止して、寛永通宝のみを法定通貨としたのである。なお、寛永通宝は明治時代中期まで使用されることになる。

「寛永通宝」、「鎖国」、「参勤交代」。授業で丸暗記した一見バラバラな事柄も、背景を知ればすべてがつながる。これが、お金から歴史を見る利点の一つなのである。